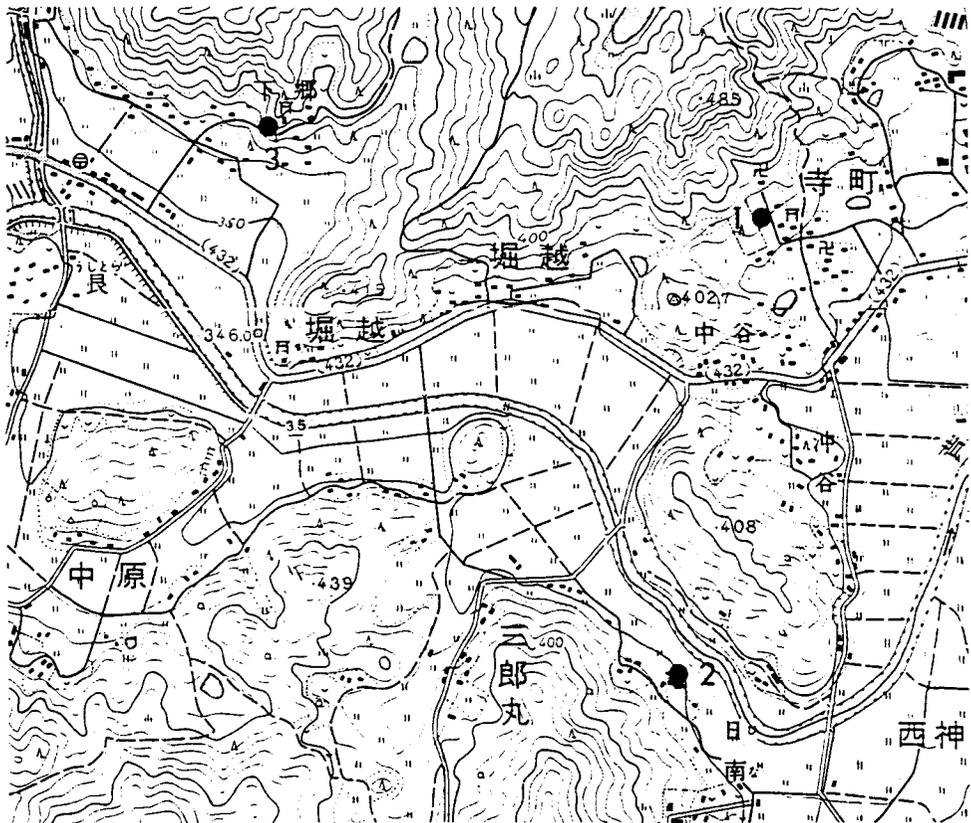


秋の古墳めぐり

平成九年九月二十一日



1. 康徳寺古墳 2. 近成山1号古墳 3. 神田2号古墳 (甲山・本郷)

備陽史探訪の会古墳研究部会

おはようございます！！！！

まずは、たくさんのご参加ありがとうございます。

今年の「秋の古墳めぐり」は世羅町の古墳を中心に見学したいと思います。

見学する古墳は3ないし4基になると思いますが、少なくとも3基は世羅郡を代表するばかりでなく、この芦田川流域においても貴重な存在で、終末期を語る上でもなくてはならない重要な古墳ばかりです。ゆっくりと時間をかけて隅々まで見学してみたいものです。

それから、せっかくですから道すがら古代に関係した遺跡があれば、その場所を眺めながらお話ししたいと思います。なお、見学場所、コースなど予定を変更する場合がありますので予めご了承下さい。

それでは、今日一日よろしくお願ひします！

皆揃ったところで元気に出発しましょう！

〈今日のコース〉

福山駅北口ー府中経由ー●前原遺跡ー●盾石遺跡ー●貝ヶ原遺跡ー
◎御調町立歴史民俗資料館ー◎沼城ー◎今高野山（昼休憩、お弁当）ー
◎康徳寺古墳ー●康徳廃寺ー◎近成山古墳ー◎月山（美）城ー
◎神田2号古墳ー帰福

備陽史探訪の会古墳研究部会

広島県の古墳編年表

時期	地域	太田川下流域	賀茂台地	可愛川流域	馬洗川流域	西城川流域	沼田川流域	芦田川上流域	その他の地域
		西願寺D-1号 ○ 中小小田1号 ○ 神宮山1号 □ 宇那木山2号	□ オヶ迫1号 ○ 丸山神社1号	○ 中出勝負峠8号	□ 矢谷	○ 岩脇 ○ 糸井大塚 ○ 八幡山1号 ○ 三玉大塚 ○ 浄業寺12号	○ 旧寺1号 ○ 甲山 ○ 瓢山	○ 兜山 ○ 嶋岡	
4世紀									
5世紀		○ 弘住1号 ○ 上小田 ○ 池の内2号	○ 仙人塚 ○ 三ツ城 ○ スクモ塚1号	○ 高宮白鳥					
6世紀		○ 湯釜		○ 古保利44号 ○ 若屋南 ○ 土師大迫 ○ 法恩地南 ○ 千川1号		○ 明賀 八鳥塚谷		○ 長波 ○ 山の神 ○ 迫山1号 ○ 二子塚 二塚	○ 大塚1号(東城) ○ 横大道1号(竹原)
7世紀		○ 給人原(可部)	○ 花ヶ迫 (西桑間王山)	○ 山部大塚 □ 戸島大塚 千間塚	○ 鞆奇 ○ 藤津原3号		真丸1号 ○ 黒谷墓坪1号 御年代	大迫金栗塚 □ 大坊 □ 大佐山白塚 北塚 □ 猪の子1号 ○ 曾根田白塚 ○ 尾市	○ 南山1号 近成山1号 □ 神田2号

(破線の墳形は推定、表記していないものは不詳)

1. 背景:

1) 「古代律令制の行政区画では、広島県は東側が「備後」、西側が「安芸」の二つの国から成っている。両国は弥生時代においてはそれほど文化の相違は感じられないが、古墳時代後期以降になると、芦田川下流域に畿内色を強めた高度な古墳文化が顕著になり、また、寺院が集中的に建立されるようになって、安芸とは異なった様相を呈してくる。備後は吉備の文化圏として把握されており、備後と安芸に分けられた背景には、古墳時代末期の畿内政権の政治的な動きが大きく左右していたと推察される。」(『日本の古代遺跡 26 広島』保育社 1986)

2) 「芦田川下流域には、花崗岩切石で構築された3基のユニークな石室が早くから注目されていたが、出土遺物が不明なこともあって、その性格については明確ではなかった。これらの古墳は、その後の研究によって、終末期の横口式石槨のグループに入るもので、この地域と畿内との政治的関係を示す資料として把握できるようになってきた。」(『探訪・広島県の古墳』芸備友の会 1991)

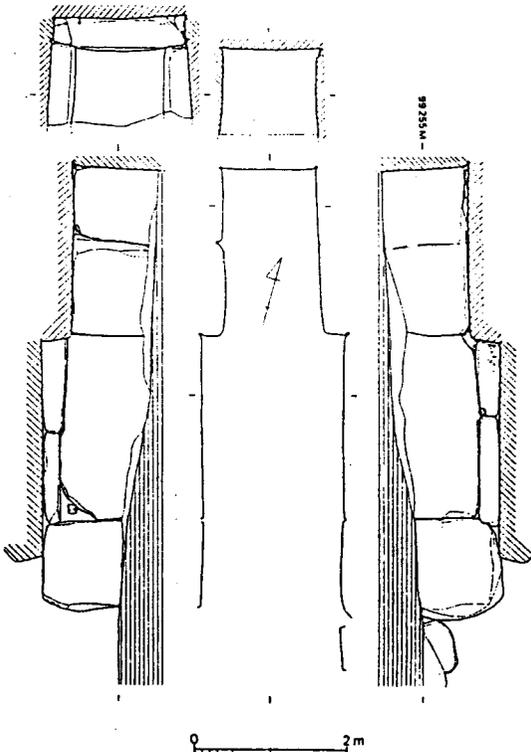
2. 目的:

上記を背景として、以前より注目されていた芦田川下流域の終末期古墳の特殊性から、最近の古墳調査から明らかになった芦田川上流域の畿内型古墳及び終末期古墳の分布を訪ねて、あらためて備後と安芸の分割、備後の吉備からの分国について考えてみたいと思います。

3. 終末期古墳とは：

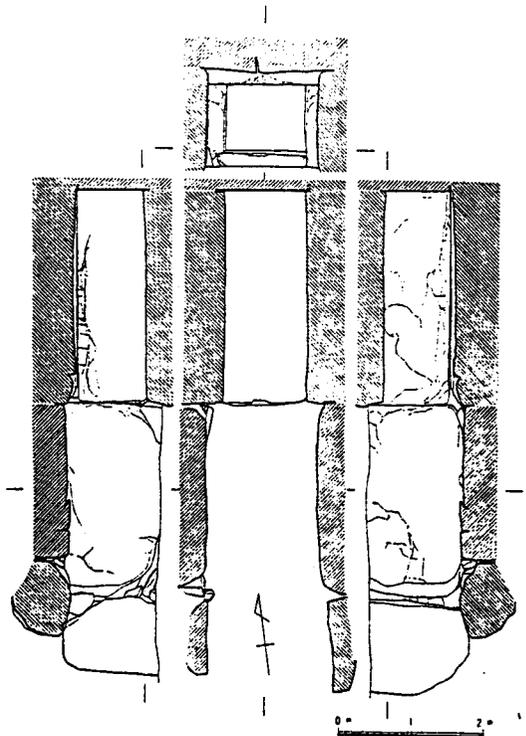
- 1) 『飛鳥時代以降の古墳の場合は、「終末古墳」または「飛鳥時代の古墳』
(斉藤 忠)
- 2) 『古墳時代の時期区分上、終末期を後期の終末段階とみるか、群集墳の形成が終わった以降の、一部の限定された古墳を考えるかまだ一致した見解はない』(「古墳辞典」大塚初重、小林三郎編)
- 3) 『①原則として前方後円墳の造られなくなった時代のもので、②円墳が多く、③花崗岩の切石で築かれた、棺をやっと納める程度のスペースしかない「石槨」と呼ばれる埋葬施設をもち、④副葬品も少ない、のが特徴とされる。』(「古墳探訪」備陽史探訪の会)

▽曾根田白塚古墳



△横口式石槨実測図(「空」No.102より)
左右対称を意識した配石がうかがえる

▽猪の子古墳



猪の子1号古墳石槨実測図(「空」第2巻より)

備中・備後の後期～終末期の主要古墳



- | | | |
|----------|----------|----------|
| ①大坊古墳 | ⑦曾根田白塚古墳 | ⑬貞丸古墳 |
| ②猪の子1号古墳 | ⑧康徳寺古墳 | ⑭篠津原3号古墳 |
| ③北塚古墳 | ⑨神田2号古墳 | ⑮楯寄古墳 |
| ④大迫古墳 | ⑩近成山古墳 | ⑯大谷1号古墳 |
| ⑤大佐山白塚古墳 | ⑪梅木平古墳 | ⑰定古墳 |
| ⑥尾市1号古墳 | ⑫御年代古墳 | ⑱長砂古墳 |

● 前原遺跡 (府中市父石町前原)

遺跡は1935年頃に行われた福塩線の建設工事に際して古瓦が出土したことにより発見された。遺跡は福塩線から南東側の山裾にかけて広がっており、遺跡は100m四方以上の広さをもつ可能性がある。遺物は多数の瓦と3点の土馬片がある。

瓦は丸瓦と平瓦の破片で備後南部に多い国府系のものと同様で、特に福山市駅家町大字中島に所在する中島遺跡のものとよく似ている。

土馬は頭部、胴から尾部、尾部のみの3破片で、頭部には口・目・たてがみが表現され、胴部には鞍もある。復元すれば長さ約20cmの大きさで、しっかりした造りである。

当遺跡の性格については、これまで寺院跡、官衙跡、窯跡などが考えられてきたが遺物の内容や地形面から国府に関連した機能を持つ官衙の可能性が高い。

● 盾石遺跡 (府中市三郎丸町大平)

府中市三郎丸にあり、宇根連山南側斜面の巨石の間から発見されたと伝えられている。長さ33cmの完形品である。

● 貝ヶ原遺跡

御調町に所在し、特殊器台を出土した西端の遺跡。特殊器台は現高68.7cmある。

◎康徳寺古墳（世羅郡世羅町大字寺町字箕口乙1400）

臨濟宗康徳寺参道の西側丘陵先端に所在。直径1.5m高さ5mの円墳である。石室は南に開口し、東に袖をもうけた片袖式の横穴式石室である。石室全長7.65m（玄室長6.55m）、奥壁部幅2.45m、羨道部幅1.9m、高さ2.7mの規模をもつ。各部の石材は比較的大型の自然石を使用している。天井石は7枚で構架され、羨道部に向かって次第に傾斜させているが、玄室と羨道部の境部分には天井石を約70cmほど下げて区別している。出土遺物は少ないが、須恵器（杯身、カメ）が出土している。築造時期は6世紀末から7世紀初頭とみられる。

◎近成山古墳（世羅郡世羅町大字西神崎字未久）

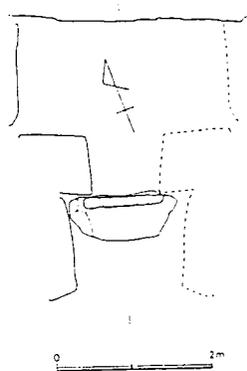
標高484mの近成山から芦田川に向かって派生した尾根の先端付近に位置する。古墳は横穴式石室墳であるが、現在墳丘は失われ長さ約2m、厚さ約0.5mの平坦な2枚の天井石が露出している。横穴式石室の長さは6.5m、幅2.4mの規模をもつ。側壁は直線的に配置され、左右の側壁とも長さ0.8～3.2m、高さ約1.9mの4個の自然石の花崗岩で造られている。石室の床面は、奥壁面から1.2mの位置までに長さ1.0m、厚さ0.4mの平坦な石を2枚置いて床面の高低差を付け、玄室と羨道部の区別を行っている。玄室部には、昭和の前半期まで凝灰岩（竜山石）の家形石棺が存在したが、家屋の敷石に搬出されて現在一部の棺材が残存している。この古墳の築造年代は、出土遺物（杯蓋、杯身、壺、直刀、鉄鏃、刀子）や、横穴式石室の構造、凝灰岩（竜山石）の石棺の存在などから7世紀後半頃のものとして想定される。

◎神田 2 号古墳（世羅郡世羅町大字堀越字神田 1057-1）

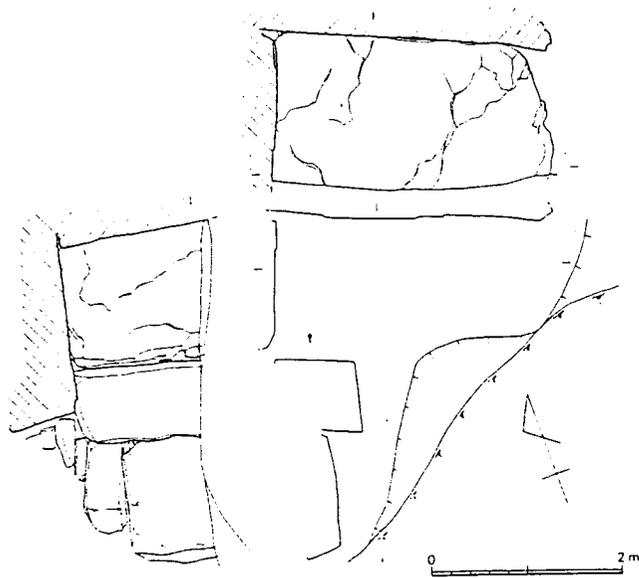
標高 493.3mの天神山の南麓の傾斜地に存在する。古墳は、これまで石室の東側側壁の石材をすべて抜き取られ、現在は奥壁と西側側壁の一部を残しているだけである。石室の平面形態は平入り構造の両袖式のものとして推定され、現存長 3.4m、玄室長 1.52m、奥壁幅 3 mである。使用石材は自然石で、奥壁及び天井石の各石材は大型の一枚石を使用している。

本古墳で特に注目されるのは、石室玄門部の閉塞施設として扉石を持っていることである。扉石は、近年まで付近の水路の橋として利用されていた。現在は世羅町教育委員会に保管されているが、半載されているものの旧状をよく残す切石の一枚石で、縦 1.03m、横 1.04mの正方形を示し、厚さ 10～15 c mとなっている。側両端から約 3cm の上下 2 カ所に直径 11cm、高さ 5～8cm の椀形の突起が作り出されている。また、軸受け石になる石は、玄門部に存在していたようであるが、最近まで石室前方の傾斜地に崩落していた。石材は長さ 1.36m、最大幅 0.6mの不整形な長方形を示し、先端から 22 c mの位置に直径 12 c m、深さ 4 c mの軸受け穴が掘り込まれていた。

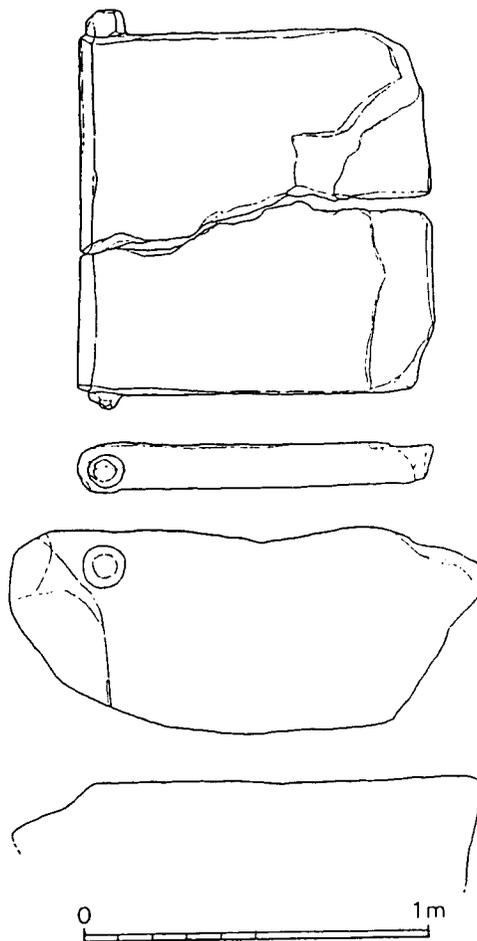
本古墳の築造年代は出土遺物がないため明らかではないが、同様の扉石を持つ奈良県花山西古墳、大阪府石宝殿古墳の築造年代から古墳時代終末の 7 世紀後半頃と推定される。



＜石室復原想定図(同七)
扉石の大きさ、軸の位置、
軸受穴などから、左のような
構造が想定される。



△横穴式石室実測図(『芸備』第18集より)
右半分は崩壊している。



△軸式扉石(上)と軸受石(下)(『芸備』第18集より)
扉石は約1m四方の花崗岩切石で、両端に腕形の軸部を造り出す。完形の軸式扉石が現存している例は全国的にもほとんどない。

4. まとめ：

古墳時代の吉備勢力の中心は岡山県にあったが、7世紀頃になってもその伝統的勢力は依然として大きく、その勢力分断が開始された。沼田川流域では、6世紀末から7世紀前半にかけて竜山石製の家形石棺の分布が急速に増加し、強い畿内系の文化が入ってきている。

→吉備の勢力分断がまず沼田側流域で実施され、安芸国が成立（7世紀半ば）。その後、

芦田川流域では、この地域が瀬戸内―世羅―三次―出雲（日本海）という交通の要衝に該当し（河川の関係も考慮）、伝統的勢力を持つ吉備を分断し、国を設立して地方行政区画の確立を目指す畿内政権にとって、備後地方の支配はきわめて重要な課題であった。その目的達成のため、王族や有力豪族が地方へ派遣されている。彼らに伴った官人の存在も含めて芦田川流域に存在する終末期の畿内型古墳とこれらの人物とは時期的に矛盾しない。

備後国の成立は7世紀後半頃と考えられている（「日本書紀」天武天皇二年（673）三月の条文に「備後国司」と言う言葉あり）。

以上のように、芦田川下流域から上流域にかけて備北の河川の関係も踏まえながら畿内勢力の吉備に対する包囲網の実体がよりよく把握出来るようになった。

